

Spiritualism News Letter

1998
第3号

10月1日発行

スピリチュアリズム・ニューズレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場 発行人/小池里予 〒441-3141 愛知県豊橋市大岩町字北山468-1 TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257
ホームページアドレス <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

シリーズ2

スピリチュアリズムから見た新新宗教 (幸福の科学・統一教会・GLAを中心として)

前号では、スピリチュアリズムから見たニューエイジ・チャネリングについて述べてきました。今回は、スピリチュアリズムから見た新新宗教について述べたいと思います。

日本における新宗教(新興宗教)といえば、江戸から明治期に確立した教派神道系の天理教や金光教や黒住教など、また大正・昭和の二度にわたる国家による大弾圧を受けた大本教、そして昭和になって急激な勢力拡大を果たした創価学会、立正佼正会、霊友会、生長の家、PL教団、世界救世教、真光教などを指します。

それに対して新新宗教とは、そうした新宗教に比べ、つい最近になって名前が知られるようになった宗教教団のことです。1970年代以降に設立されたもの、あるいはその頃からその存在が急に世間に知られるようになったもので、現在、ひじょうに活発な活動を展開しているものを指します。具体的には、白光真宏会、GLA、幸福の科学、コスモメイト、真如苑、さらにはキリスト教系の統一教会などです。そして、これらとは一線を画しますが、盛んに宣教活動をしているものとして、ものみの塔(エホバの証人)、モルモン教などが目立ちます。

新新宗教は新宗教に比べ、世界観・価値観・生命観・死生観など全般にわたって進んでいると言ってもよいでしょう。救済観・運命観に関してみても、新宗教が先祖供養や浄霊を中心としているのに対して、新新宗教ではスピリチュアリズムに近い立場をとるものが多いのです。

今回はスピリチュアリズムから新新宗教を見て行きますが、その中で代表として三つの教団を取り上げることにします。幸福の科学、統一教会、GLAです。これらを取り上げたのは、それらの教義の内容がスピリチュアリズムに非常に似ていること、そのために多くの人々、とりわけ若者の心をとらえていること、そして使命感と情熱をもって布教に取り組んでいることからです。布教に対する情熱・真剣さということであればエホバの証人などは真っ先に取り上げるべきですが、教えの内容があまりにもスピリチュアリズムから離れているため除外します。

私達スピリチュアリズムを信じる者として、これらの新新宗教とスピリチュアリズムの違いを知っておくことが必要です。スピリチュアリズムの観点(高級霊の観点)から見た時、正しいものについては認め、間違っているものについては、どこがどう間違っているのか、はっきりと指摘できることが必要です。それが高級霊の地上の道具・手足としてスピリチュアリズム(最高純度の霊的真理)普及に係わる私達の責任でもあります。

まず、これら三つの新新宗教に共通する点を整理しておくことにしましょう。その後、一つひとつの教団について問題点を述べることにしましょう。

これら三つの新新宗教の教え(教義)には、スピリチュアリズムによって示された霊的真理との共通点・一致点があります。まず、霊界という死後の世界をいずれもが認めています。死後、霊体という形

態をもって生き続けると言います。また、その死後の世界（霊界）はいろいろな界層から成り立っており、どの界層に住むようになるかは、その人の魂（霊性）の成長具合によって決定されると言います。そして死後の界層を決定する魂の成長は、地上での努力・精進を通じてなされると説いています。このように、これら三つの教団には明確な“死生観”があると同時に、自力救済という“救済観”もあるのです。

さて、その地上での魂の成長を可能とする生き方・努力とは一体何かということですが、いずれもが「利他的生き方・自己犠牲的生き方」であると言っています。イエスやシャカによって説かれた利他的生き方こそが、最も価値ある生き方とされています。さらにはまた、そうした利他的生き方、人を愛する実践の一つとして、物質主義・利己主義の世の中であって苦しむ人々に、正しい生き方を伝え教えることが大切なこととされています。すなわち“使命感”をもって布教に携わることが、最も価値ある生き方ということになるのです。

こうした教理はまさにスピリチュアリズムの言うところと同じものです。高級霊の教えそのものと言ってもよいほどです。文句のつけようがないほど、スピリチュアリズムと一致しています。この点で、これら三つの教団はスピリチュアリズムそのものと言えるでしょうし、多くの新新宗教の中で傑出していると言えるかも知れません。

それならば将来、これらはスピリチュアリズムと同じ方向に向かって歩んで行くことができるのでしょうか。これらとスピリチュアリズムはお互いに歩み寄ることができるのでしょうか。スピリチュアリズムは外見上の名称にはこだわりません。どこの教団であるかは問題にしません。ただ真理の内容が同じならばよい、という考え方なのです。霊的真理という唯一の事実に合致しているかどうかだけを重要視する立場です。同じ霊的真理を共有している以上、これら新新宗教とスピリチュアリズムは霊的真理普及に対して共同歩調を取ることができるはず

しかし結論を言えば、これらの教団とスピリチュアリズムは本質的に違っています。その違いは、教義の一部がスピリチュアリズムと異なっている、といった次元の問題ではありません。もっと本質的なところで、スピリチュアリズムとこれらの教団は違っているのです。その理由は、これらの三つの教団が同じスピリチュアリズム的な真理を共有しながら、お互いに全く歩み寄れない現実を考えてみればはっきりします。なぜこれらの教団は歩み寄れないのでしょうか。歩み寄るどころか、お互いがそれぞれ自己の教団の優越性を主張しています。スピリチュアリズムと等しい優れた真理を手にはしているはずなのに、どうしたことでしょうか。

その一番の原因は、これらいずれの教団にも「強烈なカリスマを持った教祖がいる」ということなのです。それぞれの教団では、自分達の持っている真理は我が教祖によってもたらされたものであり、その宇宙の真理を明らかにした教祖は、宇宙の中で最も優れた存在・最高の存在であると位置付けされています。そのため、これらの教団では霊的真理よりも教祖の方が重要視されるようになってしまっています。もし我が教祖がいなかったら、地上人類は真理を知ることができなかったと考えるのです。実はこの「教祖と霊的真理という関係」こそ、スピリチュアリズムとこれらの新新宗教の本質的な違いなのです。

特に幸福の科学と統一教会には、それがはっきり当てはまります。霊的真理と教祖の関係をぎりぎりまで突き詰めて行くと、これらの教団の本質が浮き彫りにされてくるのです。スピリチュアリズムは霊的真理だけを問題とします。神と人間の間の仲介者は必要ないとします。特別な人間は認めません。すなわち霊的真理が全てであって、教祖や救世主は必要ない、というのがスピリチュアリズムなのです。率直に言えば、これら二つの教団においては、スピリチュアリズムに反して、霊的真理は教祖のカリスマ確立のための道具となっている、ということです。

次にこれらの教団を別々に取り上げ、もう少し踏み込んで見て行きましょう。

幸福の科学について

教祖大川隆法氏は、自らを地球系霊団の最高大霊であるエル・カンターレの本体意識であると言います。氏は単に仏陀として再誕したのではなく、シャカよりも大きな本体意識であると言います。氏は自らをシャカ以上の存在であると断言し、さらに自分と神は一体であり、宇宙一の指導者であると位置付けしています。私達にとってエル・カンターレなどという呼称はどれもピンときませんが、別の言い方をするなら、彼は自分の存在意識は人間を超えた神そのものであると言っているのであり、また法そのものであると位置付けしているのです。こうして彼は自らの立場を、神と等しい人類史上で最大最上のもの、これ以上のものはない、というところまで高めています。

しかし彼が自分のことをどれほど大きな存在であると主張しても、スピリチュアリズムの霊的真理に照らした時、その誤謬はあまりにも明らかです。厳しい言い方ようですが、大川氏は自分に都合よく作り出した造語を駆使して大言壮語していると言わざるを得ません。幸福の科学の出版物は結局のところ、彼が宇宙最大の存在であるという独断的主張を正当化しようとする試みに他なりません。

ご存じのように、彼は初期には次々と霊言集を出しました。歴史上の有名人の霊言集を手当たり次第出すことによって、自らがこうした歴史上の人物より上に立っていることを主張しようとした。しかし彼のこの試みも、スピリチュアリズムを通じて霊界通信のメカニズムを知った者にとっては、全くの人為的なものであることは明白です。霊界通信の価値はその内容にあることは言うまでもありませんが、彼によって示された霊言の内容は極めてレベルの低いものばかりです。これらが本当に彼が霊界から受け取ったものであるとするなら、そのソース（通信霊）は低級霊ということでしょう。

また彼は自分の指導霊として、出口ナオ（大本教教祖）、中山みき（天理教教祖）、聖観世音菩薩、聖母マリア、浅野和三郎、モーリス・バーバネル、シルバーバーチ、トルストイ、ペテロ、不空三蔵、日蓮、マホメット、アインシュタイン、高橋信次、

イエス・キリスト、シャカ、天御中主大神を挙げています。ここには、他宗教の祭神や教祖や有名宗教者を一方的に自分の指導霊とすることで、自分の権威を高めようとする幼稚な論理が窺えます。背後霊現象の実態を知る者にとっては、彼の言っていることは茶番劇と言う他ありません。挙げ句の果てには、神（天御中主大神とはキリスト教の神をさす）までが指導霊と言うのですから、何とも言いようがありません。

また彼はたびたび他宗教を徹底して非難してきました。相手を非難することによって自らの立場が高いことを誇示しようとしています。これも前述した霊言集や背後霊と同じ発想から出たものでしょう。しかし、もし自らの立場が歴史上かつてなかったほどのこの世を超越した偉大な存在なら、どうしてこれほどまでに次元の低いことに係わる必要があるのでしょうか。

さらに彼は他人の前世までも勝手に極め付けるような行為に出ます。しかし幸福の科学で言うところの前世は、何の根拠もないものばかりです。スピリチュアリズム、とくにシルバーバーチやマイヤースによって明らかにされている再生の複雑さを考えると、彼が言う前世は、ほとんど全てがフィクションであることが分かります。他人の前世をとやかく言う目的が、相手を低め、それによって自分を高めようとするためであることが丸見えなのです。

結局、これらのことから言えることは、彼は霊的世界について何も知らないということです。霊的世界については、ほんのひとかけらの実感も体験したことがないでしょう。もし本当に知っているとするなら、彼は自分の行為の結末に身震いを覚えることでしょう。たとえ彼が死後の永遠の生命について語り、地上の利他的愛の重要性を説いたとしても、それは全て自分のカリスマを作り守るための手段であると言わざるを得ないのです。



大川氏が自分の指導霊・背後霊として挙げたシルバーパーチの霊訓を直接読み、これと氏の言うところのものと比較したら、それだけでその真偽は明らかになります。シルバーパーチをわざわざ自分の指導霊に取り込もうとしたのは、シルバーパーチに脅威を感じていたからでしょう。本物の高級霊の迫力に恐れを感じたからでしょう。幸福の科学の教えの偽善性は、スピリチュアリズムと比較さえすれば明白になります。ごく普通の理性を持った人間なら、程度の悪い作り話や大言壮語の中に、何一つ真実のものが無いことに気がつくはずで

その意味で、現在幸福の科学に係わりを持っている人々には、何よりもスピリチュアリズムの霊的真理を読んでもらいたいと願っています。もし時期が来ている人なら、その内容のあまりの違いに直ちに気がつくことでしょう。大川氏がやみくもに突き進んだ自己証明路線は目に余る幼稚性のため、それほど深く信者の心を洗脳できていないと思われま

本物でないものは、本物（スピリチュアリズム）が現れると、いとも簡単に崩れてしまいます。動機が純粹であるなら何一つ恐れる必要はありません。たとえ未熟さや無知から間違いを犯すことがあったとしても、それに気づいたなら、謙虚に反省して訂正すればよいだけのことなのです。

大川氏と幸福の科学にとって、スピリチュアリズムほどの脅威はないでしょう。シルバーパーチが自分の指導霊であるなどと言って繕えるうちは何とかやって行けるかも知れません。しかし、それはいつまでも続くものではないのです。信徒が目覚め、真摯な思いでスピリチュアリズムの霊的真理を直接読むようになれば、幸福の科学の教理の真偽はたちどころに明らかにされてしまうのです。



統一教会（改称世界平和統一家庭連合）について

統一教会が、スピリチュアリズム的霊的真理と強大なカリスマ教祖を持っていることは幸福の科学との共通点です。統一教会では、教祖文鮮明氏をキリストの再臨と考えています。経典である『原理講論』は、つまるところ文鮮明氏が再臨のメシヤであることを証明するためのものです。では、どのようにそれを証明しようとしているのでしょうか。

統一原理はキリスト教とは異なる独自の聖書の解釈をします。人類の罪の起源を旧約聖書の創世記の失樂園の物語に求めるところは一般のキリスト教と同じですが、その内容の解釈においては大きく隔たっています。統一原理では人類の始祖がサタンと性的関係を結ぶことによって原罪が生じ、やがてこの罪が全人類に及んだと言っています。そしてこの罪は、原罪のない神の一人子メシヤによってのみ償われることができるのだと言っています。そして神は人類を救うために、このメシヤを地上に送り出すための準備をすることになります。それが、これまでの人類歴史の歩みであったと言っています。そうした神の導きの結果この世に送り出されたのが、二千年前のイエスであったのです。ところがイエスは十字架に掛かり、その救いは未完成のまま（霊的救いはなされたが肉的救いはなされなかったと言）残されることになります。そのため神はさらに二千年の歴史をかけて導き、今、再臨のメシヤとして文鮮明氏を再び地上に送り出すようになったと言っています。この再臨のメシヤはサタンと戦い勝利して、人類に残されたままになっていた救いを成就して、人類に最終的な救いをもたらすようになると言います。人類は文鮮明メシヤによって原罪を拭い去り、完全に救われ、またそうした人間が増えることによって地上には地上天国が到来すると言っています。

経典である『原理講論』は膨大な思想体系となっています。そしてその内容は精緻をきわめ、一見、完成度の高い教理となっています。その体系の大きさ、論理展開の整合性、さらに現代の科学的知識までを取り入れた内容を前にして、初めてこれと出会った人々は反駁すべき手段を持ち得ません。これま

で統一教会の活動（募金や靈感商法など）が社会的に非難されてきましたが、それが教団にとっての致命的な打撃とならなかったのは、こうした強烈な教理という土台の上に立っているためなのです。またキリスト教サイドからその聖書の比喩の解釈の間違いが指摘されても何らダメージを受けなかったのも、これまでのキリスト教にはない思想体系をそなえていたからなのです。

外部からの非難が浴びせられても、それはさしたることではありません。なぜなら統一教会にはキリスト教にはない霊界の知識があり、イエスを含めた全ての霊界の人々の応援・バックアップを受けていると信じているからです。外部からの反対は単に地上での出来事であり、霊的に無知な人々がなす偏狭な行動に過ぎないと思っています。自分達こそが霊界の意向にそい人類を救う最高の使命を与えられている以上、そうした反対は取るに足りないことと考えているのです。

これまで、この統一原理の本質・根幹部分に対して踏み込んだ批判はありませんでした。なかったというより出来なかったと言うべきでしょう。しかし今、統一原理の核心部分に対しての批判がスピリチュアリズムにおいて初めてなせるようになりました。一見、完璧で矛盾のない壮大な統一原理は、人間が原罪を持つところから出発します。この出発点が正当なものであるなら、その後の精妙な論理によって、文氏がメシヤであるという証明も可能となるかも知れません。

統一原理の権威の根拠は霊界であり、イエスを含めた霊界の人々に置かれています。また文氏こそ霊界において最も権威ある人間であることに置かれています。また彼ほど霊界の全てに通じている人間はないことを認めることにおいて、統一原理の権威は保たれています。文氏は霊界の人々全てを含めて、誰よりも霊的事実に通じていると信じられています。これが統一教会の打たれ強さの理由だったのです。また世間の人々が適切な批判・反論を加えることができなかった理由でもあったのです。

しかしスピリチュアリズムは、統一原理の領域内

に入って同じレベルからストレートに臨み対することができません。統一原理の評価・批判は、「霊的な事実」という点においてなされるべきものです。統一原理に対する真偽は、それが（霊的）事実であるのか事実でないのかという点において、はっきりさせられるべきものなのです。それが出来るのは、言うまでもなくスピリチュアリズムにおいて他にありません。なぜなら、スピリチュアリズムほど霊界の事実を細部にわたって明らかにしているものはないからです。

スピリチュアリズムによって明らかにされる結論を言えば、統一原理の出発点であり同時にメシヤ観の土台になっている原罪は存在しないということです。そういう事実はこの世にもあの世にもないのです。また原罪を作る原因となったサタン（墮天使）も霊界に存在しません。この二つのことが意味するものは実に重大です。なぜなら、このことによって膨大な統一原理の全てが根底から崩されてしまうからです。当然メシヤの必要性の根拠も失われるし、文氏がメシヤであるということも全て虚構となるのです。霊界にいる高級霊で、原罪の存在、そしてサタンの存在を認める者は誰一人としていません。

スピリチュアリズムは、それこそ霊界の全ての高級霊における知識の総結集が背景となっています。統一教会の立場では、メシヤ文氏は、こうした霊界の高級霊よりも霊的事実に通じて霊界の事実を知っている。その彼が言う以上、やはり統一原理のほうが正しいのだと言うでしょう。原罪はある、サタンはいると必死に言い張ることでしょう。しかし肉体を持ち脳の意識で思考する地上人は、その認識レベル、知り得る霊的知識は宿命的に限られています。それに比べて、肉体を持たずに自由に存在する霊界人は、地上のいかに卓越した霊能者よりも比較にならない認識能力を持っているのです。

近い将来、間違いなく、スピリチュアリズムは統一教会にとっての最大の脅威となるでしょう。スピリチュアリズムは、霊的事実を統一原理に指し示すことによって、統一原理を根底から覆す力を持って

いるのです。キリスト教からの反発も、マスコミからの非難も、政治的な圧力も、統一教会にとっては真の脅威ではありません。それらはむしろ内部の結束を固めてくれるありがたいものなのです。統一教会にとっての真の脅威はスピリチュアリズムという霊界の事実なのです。

スピリチュアリズムが最大の脅威であるという点では、統一教会は幸福の科学と同じです。すでに統一教会では、スピリチュアリズムに脅威を感じ始めているのでしょう。統一教会系列の出版物（『霊界を科学する』野村健二）の中で、わずかですがシルバーバーチについて触れています。しかしそこでは、シルバーバーチは再生を否定している者として紹介されています。何という自分に都合のいい理解なのでしょう。自己の教理の正当性を主張しようとするのは構わないことですが、白を黒と言うようなことはすべきではありません。度を越した自己正当化はマイナスを作り出すだけなのです。

幸福の科学と統一教会について述べてきましたが、両者の共通点をもう一度、整理してみましょう。

大川氏や文氏がどれほど霊界の事実を全て知り得ると自己主張しても、それはほんの部分的なものに過ぎません。スウェーデンボルグは霊界に何年間にもわたって訪れ、霊界の事実を明らかにした人物として歴史的に名を知られていますが、実は彼が示した内容は、霊界にいるごく普通の者において知られ得る常識レベルの知識に過ぎません。それはスウェーデンボルグはどこまでも地上の人間としての霊界訪問であり、臨死体験の領域に在ったからなのです。そのため限られた霊界の様子しか明らかにできませんでした。しかもその記述は潜在意識の強烈な脚色によって、かなり真実性が薄められたものとなっています。

高級霊によってあの世からストレートに地上に送られてきた情報と、地上サイドの人間を通じての情報では、その内容には天と地ほどの違いがあります。シルバーバーチやインペレーターなどの高級霊の通信と、大川氏や文氏の語るあの世についての内

容を比較するだけで、どちらがより広く・深く・正確に霊界の様子を認識しているかは一目瞭然なのです。結局は、大川氏も文氏も人為的・人工的の教理を説いたに過ぎないことが分かります。どれほど自分達は霊界でトップであると主張しても、それを実際に認める霊界人は誰ひとりいないのです。

この両教団を信じている方達に対しては、スピリチュアリズムの説く霊的真理と自分達の教理を比較されることを願います。どちらがより深く霊的世界について明らかにしているかを十分検討してください、ということです。人間に理性が与えられているのは、これを用い比較して、より正しいものを見つけ出すためです。疑うことを禁止するのは、神が人間に理性を与えた趣旨に反することなのです。自分達の教理が絶対に正しいという自信があるなら、他との比較に脅えることはないはずです。

幸福の科学と統一教会について結論を言えば、霊界の高級霊で大川氏や文氏の権威を認める者はいないということです。また両氏が主張する、自分達だけが特別であるという立場を認める者もないということです。結局、それらの教団の教理の中から、教祖の権威とその存在の必要性を取り除いて、後に残ったスピリチュアリズムと共通する霊的真理のみが、霊界に通用するものなのです。

これら二つの教団では、霊的真理を教祖のカリスマ確立に利用してきました。また死後の救いを手段にしたり霊界の罰をほのめかせ、信者の心を煽り、多くの純粋な人達を狂信的な信仰の道へと駆り立ててきました。

統一教会が世界布教のためにアメリカに進出し、結果的に敗退の憂き目に遭ったのは、統一原理という人為的教理が、ニューエイジという、より本物に近い教理に敗れ去ったことを意味します。再臨のメシヤという錦の御旗を掲げた神権政治確立の野望が、ニューエイジ的世界の前で挫折を余儀なくされたのです。長い目で見れば、地上的な洗脳や間違った使命感だけでは人の心はつかめないものなのです。

幸福の科学も統一教会も部分的にはそれなりに正しい霊的真理を説きながら、その一方で強力な教祖のカリスマを打ち出しました。教祖は天によって公認された特別な立場であると考えます。しかしそのために教理の全体的な方向性は、各自の魂の成長を最優先することです。すなわち教団のために働くことが神のために働くことになり、それが最も価値ある信仰と人生であることにすり替わっています。そこでは結果的に、霊的真理や魂の成長より教団と教祖が重要視されるようになっていきます。

たとえ自分達の教団は魂の成長を重要視しているとして力説しても、それを最優先としなければ、おのずと魂の成長は後回しになり、やがてそれも押し潰されてしまうようになります。魂の成長についての方針は、それを重要視するというのではなく「最優先する」というのでなければなりません。魂の成長が教祖のカリスマに押し潰されているのが、それら二つの教団の実情なのです。

カリスマ確立に関して見る限りでは、統一教会が数段上を行っているようです。幸福の科学では有名人や神々を自分の指導霊にしたり、数多くの著名な人物の霊言集を作るなど、自分で自分の偉大さを並べ立てることによって自らの偉大さが証明されるとするような、見え透いた手段を取っています。

それに対して統一教会は、サタン—原罪—メシヤによる救済といった精妙な論理体系を作っています。方法において両者の間には、子供と大人ほどの違いがあります。統一教会ではその精巧な論理性ゆえに強烈な洗脳が可能となり、死後も霊界において地上同様な狂信世界を作り上げることが考えられます。この点では、ものみの塔（エホバの証人）やクリスタデルフィアンの信者と同じような死後の経過をたどることになるでしょう。

幸福の科学も統一教会も、教祖の死後、急激に勢いを失うことになるのは間違いありません。なぜなら、一人の人間によってのみ救いが与えられるという狂信的信仰は神の造られた摂理に反し、霊的な目覚めの到来した人間を、もはやつなぎ止めることは

できなくなるからです。

幸福の科学も統一教会もともに、地上ユートピア建設、地上天国建設の最終目標を掲げています。しかし本当に神と人類に貢献したいということならば、それらの教団の中から真っ先に教祖の存在とカリスマを否定すべきなのです。そして後に残った霊的真理だけを教団の教理とすべきなのです。そうした時、各自の魂向上のための努力が教団の中心の方針となって行くでしょう。それでこそ初めて、霊界の道具となって働くことができるようになるのです。利他愛・自己犠牲の愛のすばらしさ、そして霊界という永遠の世界の存在が、単なる自己アピールの材料から真に生きたものとなるのです。

GLAについて

幸福の科学・統一教会に比べ、GLAはきわめて良心的です。それは高橋信次という教祖の人間性に負うところが大きいと思われます。彼は稀に見る偉大な霊能力者でしたが、それだけに止まらず実に誠実な宗教者でもありました。彼の霊能力ならびに人格、そしてその教理から判断すると、彼はまさしくスピリチュアリズムの高級霊の働きかけを受けていたと思われます。おそらくは、彼は明治以降最大の使命をもって現れた日本人であると言ってもよいでしょう。

彼の働きは、それ以前からあった日本心霊科学協会が精彩を欠き低迷する中で、その使命を代わって果たしたと言えるでしょう。彼によって、スピリチュアリズム的な実践的信仰がはじめて日本にもたらされたと言えます。多くの時期の来た人達が高橋信次の教えによって目覚めさせられたという事実は、高橋氏が我知らずのうちに、スピリチュアリズムの道具として貢献したことを意味しています。

霊能力と同時に内省的な方向を持った高橋氏は、日本の中にあって希有の人材でした。出口王仁三郎を凌ぐ日本の誇るべき人物でした。しかし地上にいる以上、いかに卓越した霊能力者であっても、霊界人のように全ての霊的事実を知ることはできません。

彼はイエスとシャカの霊格の違いについても知ることはできませんでした。そのことは、彼の霊的レベルがどの程度のものであるかを示しています。

彼は教団内に多く出現した異言を霊的成長の証としました。しかし異言自体は古今東西を通じてかなり頻繁に見られるありふれた霊的現象であり、霊的成長度とは全く無関係のものです。事実、高橋氏生存中にも信者の中から、「人格的に劣る者が異言を吐いているのは矛盾しているのではないか」という疑問の声が上がっていました。また異言は必ずしも前世を証明するものではないにもかかわらず、彼は教団内に多くの異言を語る者が現れたことをもって、GLAには特別な歴史的使命があると考えたのでした。GLAにはシャカの十大弟子、キリストの十二弟子をはじめとする過去の世界中の偉人が集まり、GLAは人類に最終ユートピアを建設する使命を持っていると解釈しました。

しかし、これは明らかに独断的誤解でした。霊的現象は一般の人々には魅力あるものであり、自己の教団が歴史的なものであることをアピールするには持って来いの方法です。しかし霊現象はそれほど力を持ったものではありません。人間の心を深いところから変える力はありません。高橋氏自身もそれについては理解していたようで、霊現象にとらわれることの愚を説いています。しかし、その一方で異言を過大評価し、GLAに歴史上の重要人物達が結集していると大きな誤解をしてしまいました。そしてこの誤解は、GLAのその後の運命にとって致命的ともいえる打撃をもたらすことになりました。

霊現象に引かれ集まった人々は、歴史の例に漏れず必ず問題を引き起こすようになります。高橋氏のこうした霊現象の扱いに対する失敗は、彼の死後、教団分裂という事態を招くこととなります。異言や退行催眠による前世探求があまりにも根拠のない、いい加減なものであり、低級霊にとっての絶好の働き場所であることを私達はよく知っていますが、そうした霊現象を前面に押し出した教団運営の結果が

いかなるものであるかを、奇しくもGLAが自ら証明してしまったのです。霊能で人が集まれば必ず霊能で混乱を生じるようになるのが必然的成り行きなのです。折角もたらされた内省的教理も、こうした人間（特に霊道の開けたとされる人々）のエゴをコントロールすることは出来なかったのです。

しかし、高橋氏が大川氏や文氏と違っていたのは、彼らほど積極的に自らのカリスマを確立しようとしなかったことです。確かに彼も、自分を仏陀の再生者、さらに晩年には、人類に最終ユートピアを実現させるために現れた真のメシヤであるエル・ランティーと公言するような間違いをしてしまいました。自らをシャカとイエスとモーゼスの意識を包含した、彼らよりもっと大きな存在としたのです。これは明らかに霊的真理と霊的世界に対する無知をさらけ出すものです。このように高橋氏も、一步間違えたとこの世の醜い教祖に転落寸前の状態にありましたが、彼の場合は、その誠実な人間性がそこまで至らしめることを阻止しました。

とは言っても、彼の作り上げた間違った見解は、彼の死後大川氏に全て引き継がれ、各種の霊言路線になったり、エル・カンターレ路線を作り出すことになるのです。幸いなことに高橋氏の優れた人間性が、GLAが地に墮ちるのをギリギリのところで食い止めました。また彼が50歳前にしてこの世を去ったということが、結果的には幸いして、霊的墮落への歯止めがかけられたのです。

霊界における最大の事実とは、イエスを頂点とした高級霊一丸となった人類救済の組織活動であることは言うまでもありません。これに勝る霊界での大きな動きはありませんし、これ以上の力を持つ存在もありません。地上でいかに卓越した霊能者であっても、知り得る霊界の事実は限られています。高橋氏ほどの不出世の霊能者であっても、イエスを中心とする霊界最大規模のプロジェクトの事実を知ることはできませんでした。高橋氏は無意識のうちに間接的にこの霊界の大計画の一つの駒として、霊的眞

理普及に協力してきたのです。

高橋氏は正確な自分の立場と状況を理解できないまま他界しました。霊界から見れば、彼が生前説いた教理・教えには多くの誤謬がありました。シルバーバーチに代表されるスピリチュアリズムの霊的真理とその内容を比較すれば、そのレベルの差は歴然としています。彼が晩年に最もしなければならなかったことは、自らのカリスマを霊的真理によって否定することでした。また霊的真理こそ全てで、自分も一人の地上の道具に過ぎないことを表明することでした。彼がこうしたことをどのくらい自覚していたのか、その実情については知ることはできませんが、結果的には、彼はそれをなすことなく重要な問題を残したまま他界することになりました。

GLAの優れた点は何といってもその内省主義にあります。GLAの教理ではそれを、「イエスや仏陀の説かれた原点に還る」という言葉で表したり、「イエスに還れ、仏陀に還れ」という言葉で表現しています。しかし厳しい見方に立てば、イエスの教えとシャカの教えが同じ普遍的真理であるとは到底言うことはできません。これは高橋氏があまりにも仏陀に引かれ過ぎたための結果なのです。霊界では、イエスとシャカの霊的レベルは比較にならないものであるのは常識的なことであり、両者を同列に置くことは大きな間違いなのです。シャカが地上で悟った内容とは霊的なものではなく、きわめて物質次元に限られた現象についての法則であり、およそ普遍的な霊的真理と言えるようなものではありません。神の存在を否定しようとしたのがシャカの悟りの実情であったし、シャカは死後の世界や救いに関心を持つことを我執として不問に付したのです。それでいて自ら悟りを得たと思ったことは、明らかに錯覚だったのです。高橋氏が掲げたような内容を、シャカが地上時代に悟ったものではありません。

このように考えると、GLAにおける教えは、高橋氏個人の先入観に支配された教理であることが分かります。彼は自分で勝手に作り上げたシャカ像を

事実のものとして教理を確立し、それを生涯通してしまったのです。本来はイエスとシャカの教えはとても相容れることができないほど隔たったものです。地上時代のシャカの悟りを普遍的真理とみなすことは到底できないことなのです。シャカの縁起の法が普遍的霊的真理ではなく、イエスの愛の教えこそが普遍的な霊的真理なのです。異言という霊的現象の威力でそうした矛盾は陰に隠れ、シャカとイエスが同じ普遍的真理を説いたという、大きな誤解が真実として定着してしまいました。

高橋氏の後継者佳子氏の代になってからは、こうした父高橋氏の問題点が徐々に改善されつつあるように思われます。父親のシャカ重視が訂正され、キリスト教的な利他愛重視の方向に動いてきました。そして同時に、心霊現象（異言）を重視したかつての路線がかなり改められています。何より良いことは、徹底して内面主義路線を進んでいることです。父高橋信次氏のカリスマは徐々に薄くなり、それに比例して、教団は全体として霊的に向上してきました。外見的には信次氏存命中ほどの迫力はなくなりましたが、そのぶん正統的な霊的修行が徹底されるようになり、霊的視点から見たときに明らかに向上してきていると思われます。そして教理の内容も、スピリチュアリズムに極めて近いものになってきています。今後は教理の整備と同時に、信次氏ならびに自分のエル・ランティーとしてのカリスマをいかに払拭して行くか、ということが課題となるでしょう。

日本の歴史上、現在のGLAは最もスピリチュアリズムに近い存在であると言えます。現在存在する宗教団体の中で、GLAが最も霊界の良き道具となる可能性を持っていると思われます。今後の健全な発展を見守って行きたいと思えます。



以上、現代を代表する三つの新新宗教を取り上げて見てきました。冒頭でも述べましたように、これら三つの宗教ではいずれも、霊界の实在、霊界での永遠の生命、そして地上での生き方によって霊界でのレベルが決定されること、もっとも大切な生き方は絶対的な利他愛の実践であること、を説いています。まさにこれは、スピリチュアリズムによって明らかにされた霊的真理そのものと言えます。

しかしそうした霊的真理が、教団を構える中で教祖のカリスマと教団の権威に押し潰されてしまっています。霊的真理よりも教祖や教団が重要視されているのです。せっかくスピリチュアリズムと等しい霊的真理を持っていながら、それが教祖や教団の権威づけの道具として悪用されているのです。それは明らかに霊的真理から大きく外れるものです。結局、本物でない偽物の宗教と言わざるを得ません。

教祖が健在で、そのカリスマの威力があるうちは洗脳の渦の中で全体を走らせることもできるでしょう。人間的な意欲の発動によって爆発的な行動力を示すこともできるでしょう。一見すさまじい勢いで発展しているかのごとき時期を迎えることもあるでしょう。しかし所詮、本物でないものは長続きしないし、必ず破綻の時がやって来るのです。

これらの教団に一旦は人生を捧げ、すべてのエネルギーを注ぎ込んだ人達が、それが本物でないことに気づいた時、後に残された道はスピリチュアリズムしかあり得ません。なぜなら、これまでの真理をさらに深く、さらに高めているのがスピリチュアリズムだからです。一度、霊的真理の一部を知った者が、それ以下の低い真理で満足できるはずがありません。早晚、こうした教団で人生を捧げて歩んでいる人達にも気づきの時が訪れることでしょう。また一刻も早く、その時が来ることを願います。

客観的に考えてみれば、こうした教団で人生を捧げようと歩んでいる人達は、霊的な目も開かれ、霊的真理にも馴染み、さらには霊主肉従の自己克己の

努力もしています。そして現実的に自分の人生を犠牲にして、人のために働こうとしています。たとえ一人ひとりには教祖や教団に騙され利用されているとしても、霊的真理にそった真摯な歩みの内容は魂に蓄積されているはずで、物質に流されているこの世の人とは比較にならない程の、高い歩みをしているはずで、

いずれ時期が来ればそうした人達は、スピリチュアリズムの真理を深く受け入れることができるでしょう。霊界は、スピリチュアリズム普及のために純粹に人生を捧げることのできる人材を待ち望んでいますが、彼らは、その至近距離にいると言えるかも知れません。いまだに霊的真理に目覚めることなく、眠ったような中にいる宗教者とは比べ物にならない歩みをしていることは間違いないのです。

スピリチュアリズムが今後、高い次元で受け入れられ展開して行くのは、こうした人達を通じてだと思われま。そういう意味もあって、前号のニューエイジに続いて、今回、三つの新新宗教を取り上げました。



自分を忘れ、他人のことを思えば思うほど、
それだけ自分が立派になるのです。

(利他愛の実践)

利他愛の実践は魂の成長にとって必須条件

魂を成長させるためには利他愛の実践は不可欠です。利他愛とは霊的エネルギーを周りの人々に与えることです。自分や自分の家族のことを心配したり、一生懸命になることは誰でもできます。しかし、それによって魂の成長がなされるわけではありません。自分の利益とは関係のない無償の行為が利他愛です。この利他愛の大切さを強調しない高級霊はいません。霊訓では繰り返し繰り返し、利他愛の実践の重要性を説いています。ここでもう一度、利他愛について考えてみましょう。

地上の大部分の愛は利己愛

さて利他愛について知るために、利他愛の反対である利己愛について見てみましょう。この利己愛を観察することで、利他愛について深く知ることができるはずです。“愛”という真っ先に思い浮かぶのが恋愛です。恋愛がいかにか心地よいもので、楽しく心弾ませるものであるかは、いまさら説明する必要はないでしょう。一生を神に捧げようと固い決心をしたはずの独身の修道者を、人間の世界に墮としめ引き戻してしまうのが恋愛です。恋愛の喜びは麻薬のような恐ろしい力を持っています。もちろん恋をする二人は、自分達の愛の純粋さを疑いません。

しかし、そうした一見すばらしく感じられる恋愛も、霊的視点から見ると、実は本能から出たものであることが分かります。恋愛感情の深層には、相手を独占したいという支配欲が根を下ろしています。恋愛感情が最終的に行き着くところは、相手を独占することです。ですから激しい恋愛であればあるほ

ど、その裏返しとして強い憎しみや苦しみに伴うようになります。恋愛につきまとう苦しみは、すべて自分の所有欲・独占欲に原因があるのですが、恋愛感情の麻薬的甘さの中にある時は、なかなかそれに気がつかないのです。恋愛は本能的感情なので、本人達の心を支配しているのは、好き嫌いという本能的な思いだけです。そうした利己的で自己中心的な感情を、多くの人々は愛と錯覚してきました。恋愛は霊的に見た時、決して賛美されるものではありません。動物の本能と同じレベルのものであって、霊的なものではありません。特別な自己克服の努力が要求されるものではないのです。

本能に由来する恋愛感情は、いつか必ず冷めるようになっていきます。長続きしないようになっていきます。そして恋愛感情が冷めた後には、必ず苦しみが生じるものです。その苦しみは恋愛感情の激しさに比例して当人に返ってくるようになります。その苦しみによって利己愛の間違いを知り、本当の愛の何たるかを知ることができるならば、恋愛は真の愛を知るための反面教師となるでしょう。しかし恋愛感情に流されたままで、魂が成長することはありません。

この恋愛に代表される「所有欲・独占欲」と「好き・嫌いの感情」による関係が恋愛ばかりでなく、地上で愛と言われるものの実態です。相手のためと言いながら、本音のところでは自分を中心とし、自分の思いどおりになることを願い、自分や自分の家族のためだけの利益を求めます。もちろん誰も、わざわざ意識的に自分だけの利益を求めようと考えているわけではありません。意図的に相手を独占しよ

うと思っているわけではありません。本人は相手のために尽くしているつもりでいるものの、無意識のうちに独占欲・支配欲が心を占めてしまうのです。無自覚のうちに、我知らず自然となってしまうのです。これが恐ろしいことなのです。その原因は、私達が肉体を持っているためなのです。霊体は肉体という重いベールに包まれ、いつもその制約を受けているため、いつのまにか利己的な感情が心の中心を支配するようになってしまうのです。

霊界の人々と違って、常に思いの中に利己性が随伴する地上の人間が高い世界を目指すためには、本能的心をコントロールするという“霊主肉従の闘い”を余儀なくされるのです。そして利己的思いに打ち勝つための内的な闘いを克服した時のみ、霊界人に近い霊的に優位な状態に立つことができるのです。そうした霊主肉従の状態であって、はじめて利他愛の実践に踏み出すことができるのです。

真の利他愛の見本——地上人に対する霊界の人々の姿勢

では、この地上世界において純粋な利他愛を持つにはどうしたらよいのでしょうか。どこかに完全に利他愛だけに生きている人がいるのでしょうか。この利他愛が最も価値あるものであることを人類に教えてくれたのがイエスでした。イエスの言動の中に、私達は本物の利他愛を見ることができます。しかし実はもっと身近に、純粋な利他愛の模範的实践者がいるのです。それが“霊界の人々”なのです。シルバークリスタルは言うまでもなく、スピリチュアリズムに携わり人類を救おうとしている人々、そして私達一人ひとりの背後にいて導いてくれる守護霊、こうした霊界の人々は、まさに肉体的利己性の全くない利他愛実践者なのです。高級霊からの霊界通信を通じて明らかにされたことは、こうした地上時代のイエスに匹敵する利他愛の持ち主が私達の背後に数え切れないほど大勢いて、常に愛し導いてくれているということです。

そうした霊界の人々は、ただ私達の真の幸福だけ

を願っています。私達の幸せを自分のこと以上に求め、そのために自分のことを忘れるほどに私達のために尽くし、導いてくれています。霊的摂理のもとで与えられる限りの全てのものを惜しみなく与えてくれています。そして霊界の人々は、決してその見返りを期待しません。私達が成長すれば自分のことのように喜び、私達が愚かな利己的原因から失敗すれば、悲しみ哀れに思ってくれるのです。決して怒ったり憤慨することはありません。ただ一方的に与えることだけで、全てをよしとしているのです。

私達がこれまでに会った地上人の中で、これほど純粋な真の愛で愛してくれた人がいたでしょうか。私達の母親は、確かに私達のために自分を顧みず尽くしてくれました。しかし残念なことに、その行為の大半は本能に基づいています。その愛は常に感情的で、自分の子供だけがよければそれでいい、という支配欲から出ています。しかし霊界の人々（背後霊）の愛は純粋に利他的で、見返りに対する何の期待もないのです。

私達のなすべきことは、霊界の人々が私達地上人を愛する姿勢に習うことです。霊界の人々を手本として利他愛を実践することです。そのためにはまず、肉体的思いや感情をコントロールする努力（霊主肉従の努力）を始めなければなりません。



利他愛継続の障害

利他愛の実践とは、ある時だけ、一時的に実行すればよいというものではありません。一生涯続けるべきものです。この地上世界は“心の訓練場”である以上、生涯を通じて利他愛の実践の努力を続けることが必要です。地上人生の最後まで、新鮮な奉仕意識を持ち続けることが大切です。

最初に霊的真理と出会った感動は、いつ迄も続くわけではありません。利他愛にかける情熱も、いつの間にか色褪せるといようなことも起こってきます。そして情熱が枯渇するにつれ、知らず知らずのうちに、「愛することよりも愛されること」を相手や周りの人々に期待するようになります。人からよく思われたり、尽くしてもらおうことを願うようになります。頭では与えることの大切さを知っているし、チャンスさえあったら人のために働きたいと思っているのに、知らないうちに自分の心が、与えることより与えられることを願うようになってしまいます。

これは肉体を持っているため、本能的な思いが霊的思いを覆ってしまった結果です。しかしそれでは、真理を知らないこの世の人と何ら変わらないことになってしまいます。しかも困ったことには、本人は霊的真理を知っているため、自分は霊的道を歩んでいる、この世の人とは違うのだと思い込んでいるのです。実際の霊性はしばみ涸れ果てて、ほとんど霊的な死人のようであるのに、自分は真理を知らないこの世の人とは違うというプライドだけは持っています。

利他愛継続の最大の障害とは、このような感動の喪失とともにいつの間にか忍び込んでくる、与えられることを先に期待する心、愛されることを先に願ってしまう心なのです。そしてそれに気がつかない霊的なボケと傲慢さなのです。自分を厳しくチェックできない人、謙虚でない人は、自分が霊的真理を知っていることで利他愛の持ち主になったかのように錯覚します。傲慢なスピリチュアリスト、自分の思うようにならないと、すぐに好き嫌いで判断するスピリチュアリスト、与えられることだけを期待し

ている子供のようなスピリチュアリストが何と多いことでしょうか。結局スピリチュアリストと言っても、それは名前だけのことで、霊的にはこの世の人より劣ることにもなりかねないのです。

新鮮な利他愛の意識を持ち続けるには、「自分は与えるだけでよいのだ」「与えることが自分のすべきことであって、人からもらうことではない」と、きっぱりと割り切った心構えをすることが必要です。そして自分の心が与えられることを望んでいないか、定期的にチェックすることが必要です。

もし私達の心に、少しでも相手からの見返りへの期待があると、それはわずかな期待にとどまらず、自然にエスカレートし、やがて見返りをもらうのが当たり前となってしまいます。時には、見返りをくれない相手を礼儀知らずとか、裏切り者というように考え始めることになります。そうなったら、この世の人よりももっと醜いことになってしまいます。

「与えるだけでよし、相手の反応は自分の義務とは関係のないこと、ただ与え続けよう」とのみ、心をしっかりと固めなければなりません。利他愛を実行し続けるためには、寂しさに負けない心のタフさが必要です。踏ん張る強さが必要です。いじけたり不満をこぼしたりせず、すべてを明るくやり過ごす前向きで広い心が必要です。霊界の人々が地上人を愛するように、私達はその姿を見習って行かなければなりません。それこそが、まさに地上における最高の修行なのです。そうした努力を通じて、自分の感情に流されることなく、別け隔てなく、人を愛することができるようになって行くのです。



自分の好みでない人、気に食わない人には与えないというのであれば、本当の利他愛の持ち主とは言えません。自分の子供や家族、自分に利益を与えてくれる人には与え尽くすことができるが、そうでない人にはできないというのであれば、靈的価値は半減してしまいます。

必要ならば、自分や自分にとって大切な者、価値ある者も犠牲にできる上においてのみ、そこに“靈的愛”が存在するようになるのです。常に靈的コントロールを心がけ、利他愛の実践の努力を継続することによって、本能的・利己的要素を持ちながらも、同時に真の靈的愛をつくって行くことができるようになるのです。

家族的情愛や恋愛が間違っていると断言しているのではありません。外へ向けてのより広い愛の方が上だと言っているのです。

〈シルバーバーチ1・145〉

好感を覚える人を愛するのはやさしいことです。そこには徳性も神聖さもありません。好感のもてない人を愛する—これが魂の靈格の高さを示します。

〈シルバーバーチ1・142〉

最高の利他愛の実践——靈的真理の伝道・一人でも多くの人に靈的真理を伝える

スピリチュアリズムが興された目的は、地上人に靈的真理を教え、あの世における真の救い・靈的な救いをもたらすためです。そしてそのために靈界の人々全てが、見返りを求めず、この活動に献身的に従事しています。ただ地上の人々を救いたいという純粋な思いからのみ働きかけているのです。そして幸いなことに、私達は真っ先にその恩恵にあずかり、靈的真理を知ることができました。そうした私達がなすべきことは言うまでもなく、靈界の人々と同じように、一人でも多くの人に靈的真理を伝え、本当の生き方と幸せを教えてあげることです。靈界の人々が私達のために一方的に献身的な導きをしてくれたように、私達も他人のために尽くすことです。

言うまでもなくその奉仕は、すべて自発的に、自ら喜んですべきことです。私達のなすべきことは、靈界の人々に習って靈的真理普及の手伝いをするということです。自分の一生をそのための道具として神に提供することです。自分の名誉や利益をすべて捨てても、靈界の道具として、スピリチュアリストの当然の義務として、真理普及のために喜んで人生を捧げることなのです。本当のスピリチュアリストかどうか、本当の靈的真理の実践者かどうかは、この一点において明白にされます。靈的真理を知ってスピリチュアリストになるのではなく、靈界の人々と同じように靈的真理の普及に献身的に携わることにあって、はじめてスピリチュアリストと言えるのです。

シルバーバーチは、靈的真理を知りながら、それを自分の内にとどめている人をエゴイストと呼んでいます。皆さんはそんなエゴイストにはなっていないでしょうか。自分が靈的真理を知ったというだけで、満足しているようなことはないでしょうか。

肝心なことは、それを人生においてどう体現していくかです。心が豊かになるだけではいけません。個人的満足を得るだけで終わってははいけません。今度はそれを他人と分かち合う義務が生じます。分かち合うことによって靈的に成長していくのです。

〈シルバーバーチ1・118〉



スピリチュアリズムに携わる霊界の人々のように、純粋な思いから伝道をしてこそ、私達に最高の地上人生が訪れます。霊的真理の伝道ほど次元の高い愛の行為はありません。地上における最高の愛であり奉仕なのです。マザーテレサが貧困者に対して施した無償の奉仕より、もっと価値のあるすばらしい奉仕活動なのです。マザーテレサは、無私の精神から苦しむ人々のためにその人生を捧げました。しかし、霊界という本来の世界での救いを直接人々に与えることはできませんでした。マザーテレサ個人としての魂は、その無償の愛の行為によって高められ、霊界においてはキリスト教の間違った教理の影響は速やかに拭い去られたことでしょう。しかし地上においては、肝心な霊界を目的とした核心的な救いを、人々に与えることはできませんでした。その点、スピリチュアリズムに携われた私達は、それだけでも極めて幸せな立場にいるということです。マザーテレサ以上の救いを人々に与えることのできる、恵まれた立場にいるからです。

私達は宇宙で最高のものを、他人に与えることができる特権を与えられています。後はそれをいかに人々に与えるのか、ということです。それについては何度も述べてきましたように、霊界の人々の姿勢が私達の見本です。シルバーバーチやインペレーターに習って、この世の人々に接していくのです。「見返りを求めない、自分のことを忘れて、ただ相手の霊的幸せを願うことができる限りのことをする、相手が誰であれ差別をしない、相手の態度に感情的な反応をしない、分ってくれたら喜び、拒否されたら相手に同情し哀れに思う。」これが私達が地上でなすべきことなのです。

一人でも多くの人に霊的真理を伝えることこそ、私達のライフワークです。霊的真理の伝道こそ人生で一番の仕事です。年若い方も、すでに老いの年齢に至った方も、自分に与えられた地上生命、残された余生を全てこのために捧げようと考えなければなりません。生計を得るためのこの世の仕事は、ライフワークではなく、霊的真理の伝道のための一つの

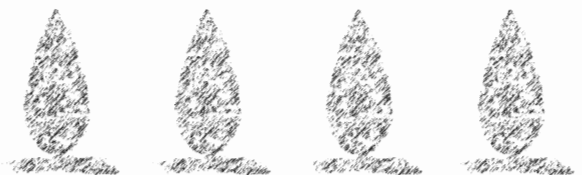
手段という位置付けをすべきでしょう。地上人生の生計を得るための仕事は何でもよいのです。

シルバーバーチは、他人のために自分を犠牲にすることの尊さを説いています。また、自分にできる限り精一杯のことをしなさいと教えています。それについて少し深く考えてみましょう。

利他愛の実践・伝道には自己犠牲が伴います。その自己犠牲とは具体的に言えば、自分のしたいことを後回しにして、自分の時間とエネルギーを他人のために優先的に傾けるということです。人によって犠牲にするものは異なるでしょうが、家族や家庭のことを後回しにしたり、友人との付き合いや趣味の時間を削ったり、伝道の時間を生み出すために仕事を変えたりするなど、霊的真理の伝道をもっとも大切なこととして、人生の中心に位置付けするということです。もし何一つ犠牲にすることなく、空いた時間に、片手間に伝道するというなら、真の利他愛とは言えないでしょう。

また、できる限り精一杯ということについても、自分に都合よく、とらえ違いをしていないでしょうか。できる限りとは、現状でよしとすることではありません。無理をする必要はありませんが、可能な限り知恵を絞り、工夫をこらし、積極的に取り組むということです。シルバーバーチは、「自分の関心事は真理を普及することだけであり、その大事業から外れたことをする人は、本来同胞のために捧げるべきエネルギーをムダ使いしている」と述べています。

皆さんは、霊的真理の伝道が人生で一番の仕事になっていらっしゃるでしょうか。



靈的真理の伝道についての心の準備

スピリチュアリズムの真理を手にした私達は、靈的真理の伝道に心が燃え立っていなければなりません。真理の普及にあたっては、何より無償の精神に立った伝道の意欲に燃えていることが必要です。それさえあれば具体的な方法は取り立てて言うべきことはありません。後はわずかな注意点があるだけです。一人でも多くの人に靈的真理を伝えたい、知ってもらいたいという燃える思いこそ、伝道において何より肝心です。

靈的真理の伝道をするに際しては、まず「焦らない」ということです。一人でも多くの人に靈的真理を知ってもらいたいという思いは、まさに純粹さから出るものです。そうした思いが強ければこそ、真理を受け入れてくれる人に出会えないと、どうしても焦りを持ってしまうようになります。しかしその時は、次の様な靈的事実を思い起こすことが必要です。

まず、「靈的真理は時期のきた人でない限り受け入れられない」ということです。時期のきた人とは、人生の悩みを通じて、心を満たしてくれる真理との出会いを待ち望んでいる人のことです。そのような人がもし皆さんと出会うならば、たちまち皆さんに引き付けられ、もっともっと話を聞きたいということになるでしょう。靈的真理に関する本を貸して欲しいと自分から言ってくることでしょう。このような人が時期のきた人ということ。靈的真理はこうした人でない限り受け入れられないようになっています。

それを無理やりセミナーに誘って一方的に教え込むというようなことをすると、一時は洗脳され、本人も表面上は心が変化したかのように感じられますが、やがて時間の経過とともにその熱も冷め、あの高まりは一体何だったのだと恥かしく思うようになるのです。さもなくば、単なる活動家になって行くかのいずれかなのです。靈的視点から見れば、活動自体が大切ではなく、それによって本人の魂が成長することが重要です。しかし現実にはその肝心なこ

とが忘れ去られ、組織の歯車として活動して、それが神のためであると錯覚している例が多いのです。靈的真理の伝道には、洗脳もセミナーも必要ありません。靈的真理の普及は、大衆扇動による一時的な感動と洗脳によって進められるものではありません。

「集団的暗示や熱狂的説教による陶酔ではいけません。理性と叡智と論理と常識、そして何より愛をもって真実を説くことによって、一人ひとり得心させて行かねばなりません。結局はそれしかないのです。」

〈シルバーバーチ7—55〉

靈的真理を一人でも多くの人に伝えたいと願っているのは、私達だけではありません。靈界でスピリチュアリズムに携わる人々こそ、私達よりずっと長い間、しかももっと純粹に、その思いを持ち続けてきたのです。靈的真理普及の働きかけは地上サイドから始まったのではなく、靈界の人々から出発しています。靈的真理普及の主演は私達ではなく、靈界の人々なのです。私達はその地上における道具としてお手伝いをしているのです。

靈界の人々は、時期の来た人が誰であるのか正確に知ることができます。その人が、どのようにしたら靈的真理に出会うことができるのかも的確に知ることができます。そしてその人の靈的背景、靈的レベル、時期、性格、環境、他に与える影響度など、すべてを考慮した上で、スピリチュアリズムの普及に最もムダのない導きをするのです。靈界の人達が最もよいタイミングを見計らって、私達と時期のきた人との出会いのチャンスが与えられるのです。



ですから私達は、「時期のきた人と出会わせてください」と真摯な思いで、毎日毎日祈り続けることが大切です。シルバーパーチは、「皆さんは、心が一つで道具となれることを自覚なさってください。」と言っています。霊界には、もっともっと人類のために働きたいと願っている人々が大勢います。地上に働きかけることのできる道具の登場を待ち焦がれています。そうした状況の中でもし地上に、「私を道具として使ってください」と言う人がいるなら、霊界で見逃すことは絶対にありません。霊界の人々にとってはこの上ないチャンスの到来です。私達が自分の利益を忘れ、ただ霊界の道具として使って欲しいとの純粋な決心をするなら、それが無視されることは決してありません。霊界の道具として自分を使ってくださいと祈る瞬間から、私達は自分ひとりの限界を超えて、何十倍、何百倍の力を持つことになるのです。自分一人では到底できなかったことが、霊界の働きによって展開して行くようになります。

ただその際、私達は霊界からの働きを、地上サイドから計るようなことをしてはなりません。一人の時期のきた人に出会うためには、霊的に全ての条件が整う必要があります。それゆえ地上から見ると、いつまでたっても変化がないように思えることがあります。しかし私達には見えなくとも、霊界では着々と準備が進められているのです。私達としてなすべきことは、「自分を道具として用い、できるだけ多くの仕事をさせてほしいと祈り続けること」「時期のきた人と出会わせて欲しいと願い続けること」そして、「今現在、そのためのベストの準備が霊界で着々と進められてることを信じること」なのです。道具としての純粋さ、燃える思い、霊界の人々に対する信頼、これこそが良き霊界の道具となるための条件です。

あなた方が道具を提供し、その道具を使って私達が仕事をすることです。

〈シルバーパーチ2・44〉

たった一人の人間も、霊の力を背後にすれば大きな仕事ができるのです。

〈シルバーパーチ7・53〉

伝道では具体的に何をすべきか

さてそうした準備ができたら、霊界の人々の導きがより効果的に実現するために、地上における受け皿を準備しなければなりません。霊界では、時期のきた人を私達と出会わせるように導きます。ですから私達としては、できるだけ人と出会う場所や時を用意する必要があります。新聞広告やチラシなどによって読書会への参加を呼びかけてもよいでしょう。自分の方から外部の人々の集まりへ参加するのもよいでしょう。また手紙などを利用するのもよいでしょう。自分でよかれと思うことは何でも試してみることです。そして自分が霊的真理を持っている人間であることを、できるだけ多くの人に知らせることです。そうすれば霊界の人々はそれを利用して、時期のきた人と私達との出会いのチャンスをつくり易くなります。霊界から働きかけ時期のきた人をその場に導いたり、インスピレーションによって私達に気づくように仕向けることができます。

シルバーパーチは、「軽くドアをたたいてみるのです。」と伝道の秘訣を教えてください。時期のきた人かどうかの見定めは、少し霊的真理をほのめかせなさい、ということなのです。時期のきた人ならば、それだけですぐに飛びついてくるはずですが、ほんの少し霊的真理を語るだけで、関心を向けるはず



一方それとは逆に、時期のまだきていない人に何とか霊的真理を分からせようと働きかけることは、時間とエネルギーの浪費に終わります。しかも決してよい結果は得られません。受け入れることのできない人々に霊的真理を分からせようとするのが伝道ではなく、時期のきた人に出会うことこそが伝道なのです。できるだけ多くの種蒔きをし、霊的真理の所在を知らせ、時期のきた人が向こうから出向いてくるようにするのが、霊界とタイアップした伝道なのです。

霊的真理を受けることのできる時期のきた人との出会いが実現した時、皆さんはきっと霊界の導きを手取るように感じられるはずです。大きな感動の体験をなさることでしょう。

みなさんは、ご自分で最善と思われることに精を出し、これでよいと思われる方法で真理を普及なさることで。
〈愛のカー142〉

閉め切られた扉をノックしてみて開かない時は、あきらめることです。ノックしてみてもすぐに開いた時は、まっすぐに突き進まれるがよろしい。
〈シルバーバーチ11-48〉

伝道についても一つ心得ておくべきことは、私達の責任は、霊界の導きによって時のきた人と出会い霊的真理を示してあげるまで、ということです。その後、霊的真理を相手がどのように活用し成長していくか、そのチャンスを本当に生かすかどうかは、私達の責任外のことであるということです。せっかく出会ったのと思って、いつまでもその相手に固執して未練を持ってはなりません。すぐ次の新しい人との出会いを求めて出発すべきです。

もちろん出会いの後、相手が求めてくる限りにおいては自分の持っているものを可能な限り与えてあげるのは当然です。また、そのための時間を惜しんではなりません。しかし相手の魂の成長に関しては、どこまでも本人任せにしなければなりません。

相手にもっともっと成長して欲しいと願うことは純粋な愛の思いですが、本人の成長は、私達のなすべき領分を超えた世界での出来事です。私達が責任を持つと考えてはならない世界なのです。与えるまでが私達のなすべきことであって、その後のことは、全てその本人が責任を負うべきことなのです。それが霊的摂理であるからです。

それから先のこと、つまりその知識を日常生活においてどう活用するかは、その人自身の責任です。
〈シルバーバーチ11-42〉

もしそうした霊的摂理を踏み外し、相手への情熱のあまり、相手の心の成長にまで関与し始めると、いつの間にか相手を自分の所有欲の対象として眺めるようになってしまいます。私達は霊的指導者になろうと思う必要はありません。またそうした人間に頼ろうと思ってもなりません。すでに霊界から真理は与えられているのです。あとは各自が自分の責任において真理を実践し、成長して行くことが大切なのです。

少人数のサークルは、霊的人生を歩む上でとてもプラスになります。スピリチュアリズムの組織化を図ることは決して間違っていることではないと思いますが、その際には最も厳しく自分をチェックしなければなりません。なぜなら神のためという出発が、いつの間にか自分の自己満足のためにすり替わってしまうことが多いからです。残念なことに、そうしたケースを目にすることがよくあります。結局は、霊的真理を利用した自己満足のための組織作りに終わってしまっているのです。

それと同じような落とし穴は、心霊治療に係わる人達にもよく見受けられます。患者に対する所有欲・支配欲に対しては、厳しく自分を律しなければなりません。誰からも評価されなくとも、霊界の人々は真実を知っているのです。それを心の支えとして、与えることだけが自分のなすべき全てであると、心を強くしなければなりません。謙虚になって、無名

の霊界の道具に徹することです。患者に対する所有欲を克服する方法は、それ以外にはありません。せつかくの神への貢献のチャンスを、自分自身のプライドや自己満足の道具としてはなりません。

霊的真理の伝道に携わる私達は、常に自分を忘れた純粋な奉仕精神を燃え立たせ、同時に霊界の人々の導きの手助けをする道具であることを常に心にとめ、淡々と歩むことが大切なのです。

わたしたちの新たな道具として、一命を捧げていただけませんか。あなたの行為によってたった一つの魂でも救うことができれば、それだけで、あなたの地上人生は無駄でなかったことになります。

〈愛の力—52〉

他人への貢献の機会を与えてくださったことに関し、神に感謝すべきです。人間として、これほど実り多い仕事は他にありません。

〈シルバーバーチ1—114〉



❖ スピリチュアリズム・ライブラリー ❖

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

◆スピリチュアリズム入門 (169頁)
-スピリチュアリズムが明かす- 「心霊現象のメカニズム&すばらしい死後の世界」

◆続スピリチュアリズム入門 (256頁)
-高級霊訓が明かす- 「霊的真理のエッセンス&霊的成長の道」

◆スピリチュアリズムの真髄「現象編」 (297頁)
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆スピリチュアリズムの真髄「思想編」 (357頁)
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆500に及ぶあの世からの現地報告 (437頁)
-エクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活-
『Life After Death』 ネヴィレ・ランダル著／小池 英 訳

◆マイヤースの通信—永遠の大道 (全訳) (271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆マイヤースの通信—個人的存在の彼方 (全訳)
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆霊訓 (完訳・上) 『The Spirit Teachings』
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

〈今後の出版予定〉

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題)
『Teachings of Silver Birch』 (全訳) A. W. オースティン編／近藤千雄 訳

〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉

◆シルバーバーチの霊訓 『A Voice in the Wilderness』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆霊訓 (完訳・下) 『The Spirit Teachings』
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆ジャック・ウェバーの霊現象 『The Mediumship of Jack Webber』
ハリー・エドワーズ著／近藤千雄 訳

◆妖精物語 『The Loming of the Fairies』
A・コナン・ドイル著／近藤千雄 訳